

第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ 出展作家 座談会① --テーマ「立体作品」



展示会場 撮影:宮脇慎太郎

若手作家が新作を発表している公募展のMIMOCA EYE / ミモカアイ。出展作家が集まり、関心があるテーマに沿って話し合うオンライン座談会を開催しました。1回目の座談会では「立体作品」について大野陽生さん、上久保徳子さん、婦木加奈子さんの3人が話しました。

—出展作品や制作について

大野陽生

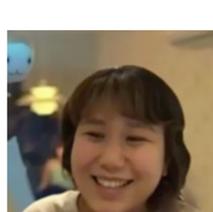


細かい手の痕跡が最終的な雰囲気につながるというような作品制作は、学生の時からずっと、素材や技法を変えて続けてきています。例えば以前作った作品は、サイズが制作場所に紐づいていて、小さいアトリエであれば密度がある小さな作品を何点か並べたりということもしました。学生時代に広いスペースで作るといった環境を体験しているので、またそういう環境で作れたらいいな、という気持ちはもちろんありますが、狭いスペースで何かこう、いろいろやってみるというのは今しかできないスタイルでもあります。作品は生活と地続きでできたモノという感じです。

ただ、今回の出展作については、応募に際してルールやレギュレーションがあったので、特に新作を作るという部分でどのあたりまで単体の作品を拡張するか、自分の持っている空間をみんなに見てもらってということに挑戦しました。結局、組み作品のような構成になりました。

上久保徳子

私は決まった形じゃないもの、これまでになような形を見たいと思ってずっと作っていて、よく立体ではマス(塊)みたいなものを意識して作る作家さんもいるんですが、自分の中ではそういうものはあまり重要視していないのかなあって思っています。作品が彫刻っぽくないと言われることもあります。素材としては樹脂を使っています。強度の問題など不安定な部分もありますが、新しく使い慣れていない素材を自分で探りながら使っている感じがとても楽しいです。どういう風な完成にしようというイメージはなくて、パーツをたくさん作って、パーツ同士を組み合わせたら面白いかなって思っています。



婦木加奈子



今回出展している作品には「洗濯物の彫刻」とタイトルに「彫刻」と付けていますが、彫刻の世界との出会いであった学生時代は、鉄板を切ったり曲げたりくっつけたりして立体を作っていく金属彫刻を専攻していました。遊ってみると、彫刻を作るようになってから「彫刻の枠」みたいなものが私の中にできて、その枠を基準に自分の作品を位置付ける、ということ意識しているような気がしています。

最近、手に入りやすい素材で作品を作りたいという思いが強いんです。大理石や丸太、鉄板をどうやって手に入れよう、と考えた時、ふと布は比較的どこでも買えて、手に入りやすい素材だと気がきました。実際に布で作品を作ってみると、板状の素材からパーツを切り出して、それらを縫い合わせるということが、金属板を扱う感覚とどこか似ているように思えて、硬いものと柔らかいもの、一見正反対に見える素材が、制作プロセスの中で似ている部分があると気付いてから、布を彫刻の素材として意識し始めました。天邪鬼というわけではないんですけど、彫刻の反対って何だろうって考えているのかもかもしれません。今回の作品は、彫刻の反対に思えるような作り方でできた作品におお残る彫刻らしさ、というものを探ろうとしたんだと思っています。



上久保徳子《ずっと傾いたスプーン》(2022年) 撮影:宮脇慎太郎

—気になる「台座」

上久保

これまでになような形の作品を作ると、置き方に悩むことがあります。いきなり置いたら何か変で、どうしても台のようなものが必要だなと思っていて。私の場合、台座とあまり言いたくないんですが、何かの台のようなもの、自分の作品と展示空間を繋ぐ接着剤みたいなイメージで作っています。立体作品を作る人たちは台座を感覚的に作っているのかな、と思っていたのですが、今回のミモカアイの作家さんは特にそう感じました。みなさん、台座や台のようなものについて、どう考えていますか。

婦木

台座の独特さって、作品に見えないものも、台座の上に置くことでこれが作品ですって言えるので、イメージとしては絵画の額縁に似てますね。自分の作品では「これが作品です」って切り取られるのとは逆の操作をやりたいって、作品が作品に見えないような置き方をしたいというか。今回の洗濯物をかけているボールも、どちらかという洗濯物然と見せるための装置なのかもしれません。

大野さんも上久保さんも台座のようなものを作っていますね。台座はもしかしたら、見えていけど見えないものとして扱われる存在という意味で、作品にとっては脇役や黒子みたいな役割かもしれないと思うのですが、お二人の作っている台座は違う感じがします。変な聞き方かもしれないですけど、なんで台座を作ろうと思ったんですか。

大野

小さい作品をいきなり床に置く見せ方には勇気がいるですね。大きい作品はそのまま置いてもいいし、壊れやすいものは台座っぽい部分が倒れ留めの役割をしていることもあります。そういう自然な基準が基本にあって、高さを調節したい時に考えるのが台座です。学生の時は白台座をたくさん作りました。

白台座と言っても結構スキルが出てしまって、上手な人にも作ってもらおうと本当につなぎ目のない台座ができますが、自分個人の制作に関して言えば、なんかそれもやりすぎているなって感じがして…。どんな台座でも制作物である以上、制作者の人となり反映されているのかなと。

私の場合は頭部のような作品を載せるので、ボリュームがある台座だと体っぽく見えちゃうこともあります。今回は、作品と言われる部分と地面との間の部分をあえて自分なりに素材とかも合わせて作ってみました。

婦木

あの台座は今回の展示のために作ったというよりも他の作品にも使う台座なんですか？

大野



そうですね、それはその時になったら考えればいかなって思っていて。結局台座ってどどん溜まっちゃうんですね。白い箱の台座だったらひっくり返してその中にどどん木の端材とか作品とか突っ込んで、倉庫に置いておくみたいな。作品も結局、人の手に渡らない分には多分展示している期間よりも倉庫にある時間の方が長くて、台座もそんな扱いになってしまいます。別の展示で使えることもあるので、ストックしておくことにも意味があるというか。私自身は作品が彫刻として見られなくても、それはそれとして新たな発見があって良いと思っています。フィギュアや工芸作品って言われてもそこでまた別の視野が開けたりすることもままあるので、そういう点も含めて台座を活用できればと。

上久保

確かに台座ばかり余ってしまう(笑)。どういう風に使えばいいんだらうって、ずっと思っていました。私の場合は、空間の中で複数の作品を展示する時は作品の一部として台のようなものを置きますが、やっぱり作品を単体で記録する時は今は台の上に乗っている部分だけを記録していますね。そこにもちょっと何か気になるところがずっとあって、どういう扱いをしたらいいのかな、難しいなって思っています。

大野

僕はキャプションに台座の材料を書くことにしています。でも展示によってはミクストメディアと表記した方が好ましい場合もあり、そういう柔軟性も大事です。展覧会全体の調子に合わせた方がいい時もあります。

台座という存在については、キャプションにそれらの素材を書けば、作品の一部として読み解いてくれる人が現れますし、また別の展示では、ただの台座になっていることもあるので、もうずっとやり続けながら考えている感じです。

婦木

キャプションに書いてある素材ってめっちゃヒントですよ。上久保さんの作品も最初は全部陶器でできているのかなって思ってたんですけど、種明かししてくれるものってキャプションしかないじゃないですか。キャプションの素材に入れてあるところまでは作品で、素材に入っていないと作品じゃない、割と大事なヒントな気がします。



上久保

全部ミクストメディアって書いてもできるけど、確かにキャプションの書き方で全然見え方が違ってきますね。ただ、インスタレーションという表現については、他の人が私の作品についてどう表現するのは良いんですけど、自分からはあんまり言わないようにしています。

大野

ハードル高いというか、ちょっと難しい、自分に負荷のかかる言葉を使うのはちょっと勇気がいられますよね。そんなこと言ったら「彫刻」もそうなんですけど。

[次ページに続く →](#)